

| | | | |
|---------|------------------------|----------|---------|
| 氏名(本籍) | いかり あや え 五十里 文 映 (富山県) | | |
| 学位の種類 | 博 士 (文 学) | | |
| 学位記番号 | 博 甲 第 3876 号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成 18 年 3 月 24 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 『文学界』時代の島崎藤村 | | |
| 主 査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 新 保 邦 寛 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 博士(人文科学) | 清 登 典 子 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 芳 賀 紀 雄 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) | 松 本 肇 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | D.L. | 川那部 保 明 |

論 文 の 内 容 の 要 旨

日本の近代文学史に大きな足跡を残した島崎藤村について、その文学的出発期である雑誌『文学界』（明治 26 年～30 年）同人時代を探ることは、当該研究にとって避けて通れない問題である。にも拘らず従来の研究では、原則、『若菜集』前史という枠組みにおいて、北村透谷のキリスト教的理想主義によった時代から上田敏の芸術至上主義の洗礼を受けた時代を潜り抜け、やがて透谷の意志を受け継ぐ形で『若菜集』の完成に向うといった図式的理解を見出し、定説であるかの如く流通させてきた。しかしこれでは、藤村が『文学界』時代を通して、具体的にいかなる問題に取り組み、どんな方法や表現を模索して行ったのか、見えてこないばかりか、その結果構想された『若菜集』の同時代的意義もまた決して見えない。事実、先行研究では、『若菜集』が青春性の解放であったと、空疎で曖昧な評価が繰り返されてきた。

それ故本論文では、何よりも先ず『若菜集』の詩人という観念を取り払い、代わりに雑誌『文学界』、及びその外側の文壇論壇の動向なる枠組みを重視する。文学青年の島崎春樹が、そこで何を考え、何を目指し、何を書いたのかを描き出そうとするものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章 先行研究ならびに本論文の課題

第Ⅰ部 第一章 <無限>への憧憬 - 『文学界』<第一期>の思潮 -

第二章 <心弱き>心の動揺 - 島崎藤村「哀縁」論 -

第Ⅱ部 第一章 <矯激>の心と<中庸>の心

- 『文学界』<第二期>に関する一考察 -

第二章 透谷の<無限>、藤村の<無常> - 島崎藤村「山家ものがたり」論 -

第三章 未熟な<感情>、成熟な<理知>

- 明治二十八年における調和的風潮と島崎藤村 -

第四章 <感情>の形式化 - 『若菜集』詩篇の七五調の同時代的意義 -

結章 まとめと展望

第Ⅰ部は北村透谷に主導された『文学界』第一期の中心的テーマの生成と藤村の創作への影響を論じている。

第一章では『文学界』第一期を通じて主張されていく〈無限〉への憧憬が、『早稲田文学』などにも見られる極めて同時代性を持つ主張であったこと、また『文学界』においては、北村透谷が〈人生相渉論争〉を行う過程で論争相手の一人徳富蘇峰の、地上の現実を離れた思考を不健全と否定する論調との対立葛藤を通じて次第に明確化され、やがて戸川秋骨など他の同人によっても担われていくものであることを考察している。

第二章は、〈無限〉への憧憬に藤村がどう係ったかという問題を、この時期の彼の代表作「哀縁」の分析によって窺おうとするものである。そもそも芭蕉に私淑していた藤村は、この頃芭蕉に準って関西漂泊を実践している。それは、彼を〈無限性を求める詩人〉と見做し、その境地に近付こうとする試みであったが、却って自らの〈弱き心〉を悟らされる結果に終わった。「哀縁」はそうした実生活を寓話化した作品であり、そうした自己を救済すべく〈情死〉を志向するという結構もまた、透谷らが〈情死〉を、相手の人間性に〈無限〉なるものを認め合う行為として賛美した事態を反映した結果に他ならないと述べている。

第Ⅱ部は上田敏の影響下にあった『文学界』第二期、さらに同人らと訣別し、一人『若菜集』の完成に向かった第三期について論じている。

第一章では『文学界』の転換について、衝撃的な透谷の自殺が〈無限〉を追求する生き方の限界を同人らに痛感させたところへ、新たに加わった上田敏が、現実との矛盾を拡大する〈真(哲学)〉や〈善(宗教)〉に対し〈美(芸術)〉は、現実と理想の調和を垣間見させてくれるとして、いわば〈美〉を介して調和思想を主導したことによって起こったと考察している。しかも上田敏の思考は、あくまで自らの信念を貫く透谷の生き方との対立を招き、『文学界』内部に〈調和〉か〈矯激〉かという対立を生み出し、ついには藤村と他の同人の分裂に繋がったとする。

第二章では、第二期の代表作「山家ものがたり」を問題にしている。藤村は、信念に〈迷い尽くし〉涅槃に至った〈矯激の人〉透谷側に立ちつつ、現世の煩惱に迷う他ない自らの現実を痛感してもいたため、上田敏のヘレニズム主義にも心引かれていくが、その矛盾した心態が主題となった作品である。その「山家ものがたり」には、〈無常〉の世を捨てる西行の境地を求めながら、その〈無常〉の世を耽溺し尽くす西行を発見してしまう〈藤村〉なる人物の姿が、幸田露伴「対髑髏」に倣って描かれているのだが、実は西行の二面性は『文学界』では早くから認識されていて、しかも第一期では前者の西行像が力説されていたのに対し、第二期では後者の像が力説される傾向が見られることから、藤村も、その動向に便乗する形で、この転換期を乗り切ろうとしているのではないかと述べている。

第三章では『文学界』第三期、すなわち他の同人らとの対立葛藤を経て藤村が自らの文学的課題を自覚する過程を、主として評論文によって描き出そうとしている。『文学界』内部で生じた〈調和〉か〈矯激〉かという対立は、透谷に続いて藤野古白も自殺したため、文壇全体を巻き込んで、〈理性〉対〈感情〉の問題、さらには狭隘な〈感情〉排撃にまで発展し、藤村を窮地に追いつめることになる。しかしそれは同時に、藤村に〈感情〉という問題を改めて自覚させることとなり、その〈感情〉の表現として生成された『若菜集』詩篇が、同時代に対して、正に近代人の〈感情〉の解放というメッセージ性を発信することとなった、と論じている。

第四章は『若菜集』について考察したもので、藤村が、近代人の〈感情〉表現の方法として〈新体詩〉を整えていくために、表現技法をどのように工夫していったかを検討している。そして藤村の努力は、何よりも、散文とあまり区別できなかった当時の新体詩をいかに韻文にするか、という問題意識に支えられたものであったと、結論付けている。

審査の結果の要旨

島崎藤村の文学は分厚い研究史に被われ、新しい見解を述べるのが難しい状況にある。『文学界』時代についても例外ではなく、既に言い尽くされ定説が出来上がったかの感がある。本論文は、先ずその先行説を詳細に検討し、実は、藤村の後年の発言に基づいた図式を繰り返しているに過ぎないか、彼を作家たらしめた『若菜集』を準拠枠にしてみているに過ぎないことを暴き、併せて、個々の作品分析の必要性を導き出している。そこで本論文の採った方法は、同時代的文脈において作品を捉えるということである。その際、雑誌『文学界』という枠組みの中でテーマや表現が定まっていく事態を描き出すのは無論だが、のみならず、その外部の文壇動向に目配りされている点は、高く評価されねばならない。かくして、島崎春樹という無名の文学青年が、自らの文学的テーマを確信し、作家藤村に変容する様態を提示することに成功している。

さらに、その結果、漠然と青春性の解放ぐらいにしか考えられてこなかった『若菜集』登場の意義が、『文学界』も文壇も＜理性＞偏重に赴く中、抑圧されてしまった＜感情＞の解放にあえて踏み切った点にあったこと、それがまた、それに最もふさわしい新体詩の形式で行われた点にあったことなど、極めて明解になっている。正にこれまでの藤村論、『若菜集』論を凌駕する画期的な研究であると言える。既に雑誌発表の段階から当該研究分野で注目されていたが、今後さらに、反響が学界全体に及ぶことが期待される。

とはいえ、瑕瑾がない訳ではない。本論文は、一方で『文学界』時代の藤村の思考の過程を明確にすべく無署名の藤村執筆の文章を発掘する程の執拗さを見せながら、全体として、分析対象を代表作に限定する方法を採っていて、研究の態度として一貫性に欠ける憾みがある。また本論文で問題にしているのは、あくまで雑誌『文学界』に発表された詩群であって、必ずしも詩集『若菜集』そのものではなかったとしても、やはり『若菜集』論がもっと充実している方が望ましいし、その方が本論文の重要性が分かりやすいものになったと思われる。しかしそれは、今後に残された課題というべきで、本論文の価値を些かも低めるものではない。本論文は、『文学界』時代の藤村の文学的事跡を辿ることをもって、その文学の本質に迫ろうとした意欲的な論考である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。